

平成 21 年度環境省北海道地方環境事務所請負業務

平成 21 年度環境カウンセラー研修企画検討等業務 実績報告書



特定非営利活動法人
北海道環境カウンセラー協会

目 次

1. はじめに	2
2. 業務の目的	2
3. 業務の概要	2
4. 業務の詳細	3
(1) 検討委員の選出及び検討会の設置	3
(2) 第1回検討会の開催	3
(3) 研修の企画・調整及び事前準備	5
(4) 研修の開催	8
(5) 第2回検討会の開催	27
(6) 本業務の総括	30

巻末資料

資料1 配布資料	33
資料2 講演資料	40
資料3 受講者アンケート	47
資料4 受講者アンケート集計結果	49

1. はじめに

特定非営利活動法人（以下「NPO 法人」という。）北海道環境カウンセラー協会は、平成 21 年度環境カウンセラー研修企画検討等業務仕様書（以下「業務仕様書」という。）に基づき、本研修の企画・運営を行った。この報告書は、実施した業務内容を報告するものである。

2. 業務の目的

本業務は、環境保全に関する豊富な知識や経験を持ち、環境保全活動に取り組もうとする市民や事業者の相談に乗るとともに、自ら環境保全活動を実践し、環境パートナーシップ作りをすることを期待される人材（環境カウンセラー）を対象として、環境カウンセラーとしての資質・能力の向上や情報交流による環境カウンセラー間のパートナーシップ形成を図ることを趣旨として開催する「環境カウンセラー研修」（以下「研修」という。）について、より効果的に行うための企画、調整、検討等の業務及びその事前準備を行うとともに、開催・運営することを目的とする。

3. 業務の概要

（1）検討会の設置・運営

業務仕様書に基づき、北海道地区における具体的な研修内容を検討する検討会の設置及び運営を行った。

検討委員を 3 名選定し、検討会を 2 回開催した。

検討委員との連絡・調整、検討会会場の手配、配付資料等検討に必要と思われる文書の作成、検討会の進行、記録等を行った。

（2）研修の企画・調整及び事前準備

検討会の意見を勘案の上、研修がより効果的となるよう検討・修正を行い、カリキュラム等の作成及び講師等の選定を行った。

検討結果を実施計画（案）として取りまとめ、環境省北海道地方環境事務所へ提出した。

配布資料等の内容について、講師及び環境省北海道地方環境事務所と調整を行い、作成した。

研修会場の手配及び講師との連絡等、研修を開催するに当たっての事前準備や各種調整を行った。

（3）研修の開催・運営

前項により決定した実施計画に基づき、研修を開催した。

研修の運営に当たっては、会場設営、受付及び講師接遇等を行うとともに、受講者に対してアンケートを実施した。

（4）委嘱・支払業務

本業務を実施するに当たり、検討委員及び講師への委嘱手続、謝金や旅費の支払業務、研修会場の経費の支払業務を行った。

4. 業務の詳細

(1) 検討委員の選出及び検討会の設置

①検討委員の選出・委嘱

業務仕様書によると、検討委員を3名程度選定し、検討会を2回程度開催することとされている。そのため、当協会では、①広く北海道の環境情報を取り扱い、幅広い人材を認知している財団法人北海道環境財団、②環境関係における市民活動のネットワークに詳しい、中間支援組織の北海道市民環境ネットワーク、③実際に環境保全活動を実践している実務家から各1名を選定することとした。人選に当たっては、北海道環境パートナーシップオフィス（EPO 北海道）からのアドバイスを基に、環境省北海道地方環境事務所担当官と協議した結果、以下の3名に対し検討委員を委嘱することとした。

【検討委員 所属・氏名】

財団法人北海道環境財団	情報交流課長	内山 到 氏
NPO 法人北海道市民環境ネットワーク		宮本 尚 氏
オフィス malma	代表	長谷川 雅広 氏

当協会は以上の3名に対し必要な委嘱手続を行い、了承を得た。

②検討会の構成・開催時期

検討会は、上記①の検討委員3名のほか、主催者として環境省北海道地方環境事務所から2名、事務局として当協会から4名により構成することとした。

開催時期については、研修内容の検討及び講師選定等のため事前に1回と、研修実施のふりかえりとして事後に1回の計2回開催することとした。

(2) 第1回検討会の開催

- ◆日 時：平成21年9月9日（水）15：00～17：00
- ◆場 所：環境省北海道環境パートナーシップオフィス（EPO 北海道）
- ◆出席者：（敬称略）

（検討委員）内山 到（財団法人北海道環境財団 情報交流課長）
宮本 尚（NPO 法人北海道市民環境ネットワーク）
長谷川 雅広（オフィス malma 代表）

（主催者）安田 将人（環境省北海道地方環境事務所環境対策課 課長補佐）
今村 和典（環境省北海道地方環境事務所環境対策課 企画係長）

（事務局）藤田 郁男（NPO 法人北海道環境カウンセラー協会 顧問）
横山 武彦（NPO 法人北海道環境カウンセラー協会 副会長）
岡崎 朱実（NPO 法人北海道環境カウンセラー協会 理事）

※NPO 法人北海道環境カウンセラー協会会長の尾寄耕策は、所用により欠席した。

座長を当協会の藤田に決定し、検討会を進行した。

◆議 題：平成 21 年度環境カウンセラー研修の開催全般についての検討

①主催者挨拶（要旨）：環境省北海道地方環境事務所環境対策課 安田課長補佐

環境に関わる様々な課題解決に当たって、環境カウンセラーの取組に期待している。来年、北海道でも「生物多様性」を主テーマとした様々な取組が行われる。この場では、建設的な議論を期待している。

②研修の開催全般についての検討

(i) 事務局から、研修の目的、留意点、開催時期、開催場所、研修の概要等の説明

○目的

環境カウンセラーとしての資質・能力の向上

環境カウンセラーとしての活動を円滑に開始するための手法等の習得

情報交換による環境カウンセラー間のパートナーシップ形成

○留意点

環境カウンセラーは、各人の持つ専門分野については強いが、より幅広い見識や態度が求められている。本研修により、環境カウンセラーとしての活動につながるような内容とすることが求められている。

○開催時期、開催場所

事務局で下記の日時、場所を仮押さえ済みであることを報告し、全体の上承を得た。

・日時：平成 21 年 11 月 6 日（金） 9：00～17：00

・場所：札幌市環境プラザ 環境研修室 1・2（札幌エルプラザ 2 階）

○研修の概要

事務局が事前に作成した研修スケジュール（案）を基に、本研修の枠組みについて検討した。その結果、全体講演、基調講演、講義、グループディスカッションの順で開催することとした。

(ii) 研修の具体的内容及び講師候補等の検討

全体講演のタイトルは「環境行政の動向について（仮）」とし、基調講演のテーマは、来年開催される「生物多様性条約第 10 回締約国会議（COP10）」を意識し、「生物多様性」を取り上げることで上承を得た。それを踏まえ、タイトルは「生物多様性と私たちのつながり（仮）」とした。なお、基調講演のテーマ決定に向けた検討の中で挙げられた意見は、以下のとおりである。

- ・ 来年、日本で COP10 が開催され、北海道においても様々な取組が行われるが、現在、取組に向けた気運や意識に盛り上がりがあるとは言い難い。
- ・ 生物多様性をテーマとして取り上げることにより、CSR だけでなく、生物多様性の保全活動とのつながりがわかる。
- ・ 生物多様性の保全に向けた活動について、十分な理解や知識が無いままグループディスカッションをしても議論が噛み合わないので、午前の全体講演と基調講演で学習することにより、午後のグループディスカッションが充実するのではないかと。
- ・ 「低炭素社会」と「生物多様性保全」を結び付けて考える好機である。

- ・事業者の場合、新しい話が聴けるのではないかと株式会社アレフ、株式会社ツムラ、佐藤水産株式会社等、企業も生物多様性の視点を生産活動に取り入れてきている。

生物多様性について、環境カウンセラーが持ち帰って、自身の活動で説明できるような内容にすることが必要である。その内容を満たすような講師の検討を行ったところ、以下の方々が候補として挙げられた。

- ・足立 直樹 氏（株式会社レスポンスアビリティ）・・・CSRが専門
- ・五箇 公一 氏（筑波大学）・・・CSRは話せない
- ・中村 太士 氏（北海道大学）
- ・鷺谷 いづみ 氏（東京大学）
- ・山澤 光弘 氏、岡野 裕幸 氏（リコー北海道株式会社）
- ・酒井 健司 氏（北海道野生生物総合研究所）
- ・堀 繁久 氏（北海道開拓記念館）

以上の候補者の中から検討した結果、生物多様性の意味や、北海道の生態系における生物多様性の状況と課題等、生物多様性と私たちとのつながりを分かりやすく話していただける講師として、堀繁久氏を第1候補者とするので了承され、後日、交渉に当たることとした。

グループディスカッションについて、全体講演や基調講演とのつながりを考えながら検討し、全体のタイトルを「生物多様性について、環境カウンセラーとしてどう伝えていくか」とした。3グループ構成とし、各グループのテーマを「私たちの生活を通してできる生物多様性保全」「企業として生物多様性にどのように取り組むべきか」「地球温暖化がもたらす生物多様性への影響」とした。なお、グループディスカッションの円滑な進行を図ることを目的に、グループ毎にファシリテーターを配置することとした。人選については、環境省北海道地方環境事務所担当官と協議した上で、受講申込者の中から行うこととした。

(iii) その他

これから本研修開催に至るまでの流れについて、確認した。また、午前の全体講演及び基調講演については、昨年度同様、環境カウンセラー以外の一般市民の聴講も可能とすることとした。

- ・申込期限 10月13日（火）
- ・受講者決定、受講決定通知発送 10月20日（火）前後を予定

(3) 研修の企画・調整及び事前準備

①講師依頼

全体講演の講師については、環境省北海道地方環境事務所担当官を通じ、同事務所の坂本真一氏（統括自然保護企画官兼生物多様性企画官）に対し、本研修の趣旨や内容を説明し、承諾いただいた。また、基調講演の講師候補者（北海道開拓記念館 堀繁久氏）に対し、本研修の趣旨や内容を説明し、

承諾いただいた。

②研修プログラムの作成

第1回検討会における検討内容及び講師との調整を踏まえ、研修スケジュール（案）を作成した。作成後、環境省北海道地方環境事務所担当官と協議し、本案を確定した（次ページ参照）。

③一般聴講者の募集

財団法人北海道環境財団のメールマガジン、札幌市環境プラザ広報誌『えこぼろ』に本研修の講演について掲載を依頼し、一般聴講者への周知及び聴講希望者の取りまとめを行った。

④受講者アンケートの作成

受講者アンケートを環境省北海道地方環境事務所担当官と協議し、作成した。

平成 21 年度環境カウンセラー研修スケジュール(北海道地区)

11月6日(金) 札幌市環境プラザ 環境研修室 1・2

午 前 の 部	10:00～ 10:10 (10分)	開会式・オリエンテーション 主催者挨拶 環境省北海道地方環境事務所 統括環境保全企画官 竹安 一		
	10:10～ 10:40 (30分)	全体講演 「環境行政の動向について」 環境省北海道地方環境事務所 統括自然保護企画官 坂本 真一		
	10:40～ 12:10 (90分) ※途中休憩 5分含む	基調講演 「北海道の生物相と生物多様性」 北海道開拓記念館 資料情報課長・学芸第一課長 堀 繁久 氏		
	12:10～ 12:30 (20分)	昼食・休憩 (新規登録者以外)	講義 「環境カウンセラー登録制度について」 環境省北海道地方環境事務所 環境対策課企画係長 今村 和典	
	12:30～ 13:20 (50分)		昼食・休憩	
午 後 の 部	13:20～ 15:20 (120分)	グループディスカッション 「生物多様性について、環境カウンセラーとしてどう伝えていくか」		
		テーマ1: 「私たちの生活を通してできる生物多様性保全」	テーマ2: 「企業として生物多様性にどのように取り組むべきか」	テーマ3: 「地球温暖化がもたらす生物多様性への影響」
	15:25～ 16:25 (60分)	休憩(5分間)		
		グループディスカッションの発表 各グループによる発表(質疑を含めて20分)		
	16:25～ 16:45 (20分)	アンケートの記入 閉会式<修了証交付>		
	16:45	解散		

(4) 研修の開催

11月6日(金)に「平成21年度環境カウンセラー研修」を札幌市環境プラザ 環境研修室1・2で開催した。受講者は27名で、そのうち新規登録者向け講義対象者は4名であった。

受講者名簿については巻末資料に記載している(午前の一般聴講者16名の氏名は記載していない)。

【議事次第】

10:00～10:05

開会式・オリエンテーション

総合司会

環境省北海道地方環境事務所

環境対策課課長補佐 安田 将人 氏



10:05～10:10

主催者挨拶

環境省北海道地方環境事務所

統括環境保全企画官 竹安 一 氏



【要旨】

本日は、「生物多様性」をテーマに研修を行う。来年、「生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)」が名古屋で開催されるので、それにちなんで「生物多様性」をキーワードとして学習していただきたい。最近、生物多様性について4つ目の危機として、地球温暖化が加えられた。

ここでは2つの点を挨拶に加えて述べたい。

1つ目は環境省の予算についてである。平成22年度予算の概算要求を10月15日に再提出した。1回目は8月31日に提出したが、「日本版グリーンニューディール」をよりどころとした。再提出では「日本版グリーンニューディール」の言葉を削除し、鳩山首相の国連での発言を受け、2020年までに1990年比で温室効果ガス25%削減を盛り込み、鳩山イニシアチブの推進や温暖化対策を中心とした基本政策を組んでいく点にある。主要事業は変わっていない。具体的には、新たに「チャレンジ25プロジェクト」に10項目を加えた。エコポイントの継続、低公害車の推進等が内容であり、来年度も継続する。12月の予算編成で、具体的な事業名が出てくる。

2つ目は情報提供であるが、北海道大学のサステナビリティウィークの中で、11月1日に同大学と当事務所共催で、地球温暖化セミナーを開催した。その中で懐疑論批判が議論された。本年5月、国立環境研究所等が市中で懐疑論が盛んになっている状況を見無視するわけにはいかないということで、懐疑論批判を行った。これは既に出版されているが、東京大学サステナビリティ学連携研究機構のWebサイトにも掲載されているので、そこで読むことができる。参考にしていきたい。

10：10～10：40

全体講演「環境行政の動向について」

環境省北海道地方環境事務所 統括自然保護企画官

(兼 生物多様性企画官)

坂本 真一 氏



【内容】

現在、環境省北海道地方環境事務所の統括自然保護企画官として、自然に関する保護や国立公園等の企画を行っている。その一方で、生物多様性企画官も併任しているので、今日はその立場で話す。

地球温暖化と同様に、「生物多様性」は最近聞く言葉だが、「身近な自然を守ろう」「高山植物を守ろう」も同義である。一言で言うと、「絶滅危惧種を減らしていこう」「生物の種を増やしていこう」ということである。古くからある概念である。その生物多様性について系統立てて話したい。

○自然のイメージは？

(会場から「森林」「大雪山」「川」「野原」「海」の声が上がった)

寒い海(流氷)、ブナの森林、マングローブの生えている海、長野の小谷村(田んぼ、山、山間に人が住んでいる。森→薪や家)、屋久島(杉の原生林、北海道には天然のものはないが・・・。屋久杉に、杉以外の桜、シダなど20種類くらいのいろいろな木が生えている。)、山が燃える静岡県の大畔山には、2年に1度新しい草が生えていく。阿蘇の野焼きが有名である。そこにしか生えない植物があり、そこにしかいない昆虫がいる。小清水原生花園→鉄路からの火で燃えていた。エゾカンゾウ、今は人工的に火を入れる。棚田→ドジョウやヤゴ、珊瑚礁)

日本の中でもこんなに多様であるが、世界を見てもっと多様である。植物があつて、動物がいて、循環のサイクルがある。いろいろな生態系がある。これを(1)生態系の多様性という。

次に、地球上にはどんな生き物がいるか？

ナキウサギ、ヒグマ、カエル、アツモリソウ、シダ、マス(鱒)、ミミズ、細菌類等、いろいろな種類の生き物がいる。これを(2)種の多様性という。

次に、テントウムシの例で見ると、二つ星、赤、黄、星の数が多様であるが、実は種類としては1種類であり、ナミテントウという。この写真はナミテントウの遺伝的多様性を示している。つまり、同じ種類でも個性が違うのである。これを(3)遺伝子の多様性という。

このように3つの多様性、すなわち(1)生態系の多様性、(2)種の多様性、(3)遺伝子の多様性がある。これらの多様性が危機に瀕している。

○生物多様性の危機

(1) 第1の危機 人間の活動や開発による影響

- ・北海道にもいろいろな湿原があるが、危機に瀕している。(札幌駅のコンコースで高校生の取組発表中) 森の貴重性も減っている。
- ・開発により、湿地や森林が減少している (サロベツ原野、釧路湿原等)。
- ・レブンアツモリソウやヒダカソウ、タンチョウ、シマフクロウが森林の減少、盗掘、乱獲、自然破壊等で減少している。

(2) 第2の危機 人間活動の縮小による質の低下

- ・北海道では意識しにくいですが、例えば、田んぼの減少によりメダカが絶滅危惧種になっている。
- ・マツタケが採れなくなってくる。かつては松林から松葉を肥料としてかき出していて、肥料が無くなったところにマツタケが生えていった。今は、松葉をかき出したりしないので、生えなくなった。
- ・担い手の減少、高齢化による耕作放棄地の増加により草が生え、例えばエゾシカ等の草食動物が増えている。エゾシカが何故増えたかは理由がはっきりしていない。ハンターの減少、地球温暖化、餌や人との接点が増えたから等と言われている。20年前は、道東や日高地域が中心であったが、今は、道央や道南も多くなっている、いまだに増える傾向にあり、20年後には、全道に及ぶであろう。

(3) 第3の危機 外来種や化学物質による影響

- ・元来そこに存在しない生物の増加や、化学物質による生態系の影響による危機で、一時期言われた環境ホルモン等も関係している。
- ・北海道における外来種としては、アライグマ、ミンク、セイヨウオオマルハナバチ、ウチダザリガニ、オオハンゴンソウ、カナダモ (特定外来生物) がある。
- ・特定外来種は、勝手に捕まえたり運んだりできなくなった。
- ・対馬のイノシシは以前捕獲して絶滅させた。しかし、今、誰かが連れてきて増えている。
- ・かつての豊平川や洞爺湖の酸性化といった環境汚染は人為的なものが原因であった。洞爺湖は盤溪の鉱山から酸性の廃液が排出され、発電で使用したために湖水が酸性化し、一時期生物が絶滅した。今は廃坑になり、中性化したため元に戻ってきている。

(4) あらたな危機 地球温暖化による危機

- ・疑わしい兆候がたくさんある。シカの増加、アザラシが増えてきているのも地球温暖化の影響か？
- ・高山ではハイマツが増えている。花の咲く時期と昆虫の活動する時期がずれたために結実しなくなっているのと北海道大学の先生が研究で述べている。

○生物多様性のめぐみ → 生態系サービス

私たちはいろいろな恩恵を受けている。

(1) 生き物が支える大気と水

- ・ダムには限界がある。九州や四国では毎年水不足になっているが、森林が保水することが大きい。二酸化炭素も植物が吸収している。

(2) 暮らしの基礎

- ・山のめぐみや大地のめぐみを受けている。紙も木からできている。生活の基礎になっている。

(3) 生き物と文化の多様性

- ・カツオが獲れることで、かつおぶしができる。サケトバは寒いからできる。生き物と気候で地域の文化ができている。

(4) 自然に守られる私たちの暮らし

- ・ダムが無くても、自然が豊かであれば安全な生活が守られる。

○生物多様性に関する国内外の動き

1972年、自然環境保全法に基づき、自然環境保全地域が定められた。日本では北海道の大平山と十勝川の源流部が定められた。ターニングポイントは1992年のリオサミットで、生物多様性条約を採択したことである。

日本では環境基本法（1993年）、生物多様性国家戦略（1995年）、新生物多様性国家戦略（2002年）、生物多様性基本法（2008年）等の整備が進んだ。自然公園法や河川法にも、生物多様性を守る概念が入っている。

第3次国家戦略を2007年に策定した。3つの目標は、

- (1) 生物多様性の維持・回復すること
- (2) 生物多様性を減少させない方法で、国土や自然資源の持続可能な利用を行うこと
- (3) 生物多様性の保全や持続可能な利用を社会経済活動の中に組み込むこと

である。

4つの基本戦略は、

- (1) 生物多様性を社会に浸透させる
- (2) 地域における人と自然の関係を再構築する
- (3) 森・里・川・海のつながりを確保する・・・知床の例
- (4) 地球規模の視野を持って行動する

である。

それぞれの地域で、地域戦略をつくることになっている。例えば、千歳市では環境基本計画の見直しの際に、生物多様性の思想を盛り込んでいる。見直しの際に、関与する人もいるだろう。今の思想を伝導して行って欲しい。



【質疑・応答】

Q：COP10に向けての日本の取組、心構えは？

A：名古屋市で開催される。市民の参加募集が来年ある。その場限りではなく、地域にアピールしていくことが必要である。北海道でも進めていくべきである。国がやるだけでなく、市民からも取り組み、声を上げていく必要がある。

Q：脱炭素と比べると、生物多様性に関する意識が低い。企業への指針は出たが、市民の行動指針を示す予定はあるか？

A：幅が広く、今ある生活との関係もあって、強制力を持ったものができにくい。外来種に関してはやっつけてはいるが不十分である。非常に難しい。道路のモルタルが緑化されているが、外来種が多い。在来種に置き換えようとしているが、コストがかかることもあり、方針の決定が難しい。また、入ってきた物をどうするか、どこがやるかという問題もある。行政としては何をやるべきか、どうやるべきか、を分かりやすく示していくことが大切であると思っている。

10：40～12：10

基調講演「北海道の生物相と生物多様性」

北海道開拓記念館 資料情報課長・学芸第一課長

堀 繁久 氏



【内容】

主に北海道の現況についてお話しする。大きなタイトルを3つの切り口（地史的時間スケール、歴史的時間スケール、現代の時間スケール）にまとめたので、それぞれのスケールについてお話しする。

【地史的時間スケール】

世界の動物地理区は大きく6つに分けられる。日本は主に「旧北区」に属するが、沖縄は「東北区」に属する。北海道と沖縄は動物地理区が違うので、ほとんど同じものが無い。ススキとニガキはあったが、昆虫はほとんど同じものが無い。



北海道とヨーロッパは同じものが多い。距離では遠いが、地理区としては一緒である。

○島の種類

- ・大陸島（長い歴史の中で、大陸に繋がったことがある）
- ・海洋島（過去に一度も陸と繋がったことがない）
例えば、ガラパゴス諸島、ハワイ諸島は海洋島である。

○動植物の分布境界線

- ・八田線：両生類、爬虫類で境界線を定めた。
- ・ブラキストン線：津軽海峡を東西に横切る線。鳥、ほ乳類、クマゲラ等で境界線を定めた。
- ・三宅線：蝶で境界線を定めた。
- ・渡瀬線：両生類、爬虫類、哺乳類で境界線を定めた。
- ・蜂須賀線：鳥類で境界線を定めた。

この中で重要なのは渡瀬線で、東洋区と旧北区の境界となっている。

○日本列島の歴史の変異

- ・120万年前～15万年前と現在では形が異なる。15万年前は、日本列島は繋がっていて、日本海は内海であった。
- ・2万年前になると、大陸と北海道は繋がっていたが、本州は離れていた。この頃に動物相が成立した。



氷河期 海水面低下 海の水が蒸発して雪になり大陸に貯まる。 ←
→島の間に陸橋ができる。
→動物が陸伝いに侵入。
→温暖期になり海峡が成立。
→島に隔離→絶滅・存続・進化

○生物地理学で注目される分類群

- ・カエル、セミ、オサムシが注目されている。理由としては、カエルは海を泳げないから、セミは幼虫期が長く定着できないから、オサムシは飛べないからである。
- ・カエルは陸で繋がっていること、水があること、温度があることが生育の条件である。
- ・琉球列島には日本のカエルの過半数が住んでいる。
(ハナサキカエル、琉球カジカカエル、ナミエカエル、イシカワガエル、ホルストガエル、リュウキュウアカガエル、オキナワアオガエル、ハロウエルアマガエル、ヒメアマガエル等)
- ・カエルの声の大きさは、喉のセイ嚢の大きさで決まる。
- ・米軍基地周辺にいる外来種には、オオヒキガエルがいる。これは、サトウキビの害虫駆除のために人為的に入れたものである。
- ・石垣島から西表島にかけて広がっている。耳から毒を出すため、犬や猫も食べない。

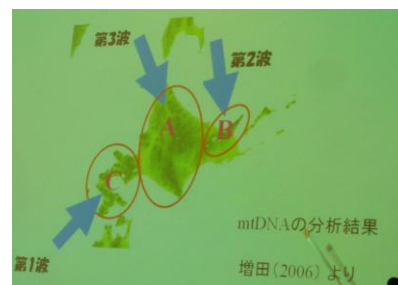
- ・カエルの在来種の比率を見ると、琉球列島には23種類いるうち21種類が在来種である。本州、四国、九州では17種類いるうち16種類が在来種である。北海道は7種類いるうち2種類しか在来種はいない。残り5種類は外来種である。

○再び脚光を浴びた生物地理学

- ・1928年に成立した。現在は、DNAレベルで調査している。
- ・ウトナイ湖畔で186kgの5歳の雄熊を捕獲した。これにトラジロウという名前を付け、発信機を付けて離れた。5年間の調査結果では、穂別町から樽前山まで人目に付かずに移動していた。長距離移動する年とそうでない年があり、作物の豊凶によるのではないかと考えられている。
- ・分子時計・・・DNAの塩基配列は一定確率でエラーを起こすことにより、いつ分化したか分かる。分岐年代を推定する手法として、DNAを利用することができる。

○北海道のヒグマ集団の三重構造

- ・北海道大学の増田先生が行ったミトコンドリアDNAを用いた研究によると、北海道のヒグマは3つの時代の異なった種類があると考えられている。まず第1波が道南方面から入ってきて、次に第2波が道東方面から入ってきた。最後に、第3波が道北方面から入ってきた。



○島の生物平衡モデル

- ・海洋島の生物種がどう決まるかを説明したものである。
- ・移入率と絶滅率で検討するもので、近い島、大きい島ほど生物種が多い。
- ・オサムシや甲虫は、大きな島ほど種数が多い。相関がある。



○おまけ

- ・シマリス・・・北海道でしか見られない。札幌近郊のものは、朝鮮種の在来種である。
- ・エゾリス・・・大陸のリスと同種であると見られる。
- ・カケス・・・本州とは違い、北海道はミヤマカケスである。
- ・エゾシカ・・・本州の鹿と名前を区別している。

【歴史的時間スケール】

草原と河畔の昆虫が急速にいなくなっている。利用しやすい場所は宅地、工業団地として利用され草原が残らない。土地利用の固定化で草原環境ができにくくなった。

草原は昆虫にとって必要なものである。

○石狩川の流れの変化

- ・明治19年～平成5年の100年間で100km短くなった。それに伴い、生物の生息環境が失われた。か

つては下流部には広大な湿原が広がっていたが、消失した。

○北海道現存植生図

- ・ほとんどが開拓地で、原生地が無くなってしまった。

○札幌産のアサマシジミ (1916年 石山)

- ・戦後にはいなくなっていたのではないかと思われる。
- ・草原環境に生息するので、環境の改変に弱い。



○ナンペイハギ

- ・新千歳空港周辺が最大の産地であったが、ほとんど絶滅した。

○ゴマダラチョウ

- ・1980年代にいなくなった。数年前に編纂された『北海道の希少野生生物』は改定の時期にきている。

○ゲンゴロウ

- ・日本には133種類おり、そのうち北海道には57種類いる。57種類のうち、2種類は私が発見した。現在、18種類が北海道の希少種として掲載されている。
- ・トムラウシで3種類のゲンゴロウが見つかった。冷たく、厳しい環境でも暮らしている。止水、流水ともに存在している。
- ・ゲンゴロウはガムシに似ているが、どちらかと言うとオサムシに近い。水の中に棲むために形が収斂されて、似てきている。
- ・野幌森林公園には、2科21種類が記録されている。流水に生息するのは2種類のみで、他は止水性である。ビジターセンターの雨水調整池に11種類が見つかった。私の周辺にゲンゴロウが暮らしていた。周囲に環境が残っていることが大切である。



○何故ゲンゴロウがいなくなったか

- ・周辺に供給源となる豊富なゲンゴロウ発生地が無くなった。
- ・平地に水草の豊富な池が無くなった。
- ・池の周囲が固められて、蛹になる場所が無くなった。
- ・重要な捕食者と考えられる鯉等の大型魚類が高密度で放流されているため、絶滅した。

○オサムシ

- ・オサムシには飛べるものと飛べないものが存在する。飛べるものは「いかり肩」、飛べないものは「なで肩」である。ススキノでエゾカタビロオサムシを見たが、これは飛べるオサムシである。
- ・オサムシ科甲虫は、肉食で捕食者として重要である。環境指標生



物の1つである。

- ・マイマイカブリは消化液を出してカタツムリを溶かして食べる。
- ・南に行くにつれて大きくなり、羽の先が尖り、色が地味になる。
- ・オオルリオサムシ・・・北海道と利尻、礼文、天売島のみ固有種で、いろいろな亜種がいる。
- ・アイヌキオサムシ・・・中山峠周辺のはオオルリオサムシと似ている。音威子府村では、両者は見分けがつかないほど似ている。
- ・北大植物園には、オサムシが25種類いる。小さな「ゴミムシ」と呼ばれるものが大半である。飛べないオサムシは捕れなかった。ススキノにも飛んでくるエゾカタビロオサムシはいた。
- ・江別市では緑地の大小に関わらず、見られた。
- ・道路で分断されると、エッジ種のみになってくる。また、荒れ地に住んでいた種が中に入ってくる。

【現代の時間スケール】

○北海道ブルーリスト

- ・北海道のホームページに公開されている。哺乳類25種類、鳥類8種類、爬虫類7種類、両生類16種類、魚類35種類、昆虫89種類、植物598種類、その他28種類で、合計806種類がリストアップされている。

○生態系は「椅子取りゲーム」

- ・生態系は「椅子取りゲーム」であると言える。何万年もの長い年月をかけて、競争を経て、現在の生物が残った。座っている椅子に乗り込んできたのが外来種である。外来種は強く、追い出されたものは座る場所が無くなった。私はアライグマのことを、「ケツがでかい」と言っている。島や孤立林の生態系では、座る椅子の数そのものが少ない。影響が出やすく、深刻である。

○ダイコクコガネ

- ・ダイコクコガネは、いわゆるフンコロガシの親戚である。現在、日本にはミヤマダイコクコガネ、ヒメダイコクコガネ、ニホンダイコクコガネ、ダイコクコガネ、マルダイコクコガネの5種類がいる。
- ・大昔は、マンモスやオオツノシカ等の糞の中に存在していた。近年、鹿が減少し、馬や牛の糞で存続している。現在は、牛馬糞の薬剤により減少し、絶滅が心配される。エゾシカに戻っているとの報告もある。
- ・北海道には苫小牧市柏原5遺跡から出土している。ここは保存状態が良く、昔の昆虫もたくさん出てくる。出土状況によると、ミヤマダイコクコガネは縄文時代には北海道にいたが、今はいない。
- ・マルダイコクコガネは、奄美大島や対馬にいる。後ろの羽が退化して飛べないのが特徴である。
- ・マメダルマコガネは、フンコロガシの一種である。フンコロガシは日本にはいないと言われているが、実際にはいるのである。全長2mmの虫で、体長と同じ2mmの糞を転がす。

○イベルメクチン

- ・牛の背中にかけて、体内外の寄生虫を駆除する薬品である。残留せず、糞と尿に混じって排泄さ

れるので、夢のような駆除剤であるが、これが糞虫に影響する。帯広畜産大学の岩佐教授の研究では、羽化率が低下したり成虫が死亡したりした。これは生態系の鎖を切るなので、問題である。

○セイヨウオオマルハナバチ

- ・見た目は可愛いハチである。特徴は黄色と黒の縞模様である。
- ・在来種は2種類で、コマルハナバチとエゾコマルハナバチである。奥尻産のコマルハナバチは形が異なるが、エゾコマルハナバチの亜種である。エゾコマルハナバチとエゾオオマルハナバチは種が異なる。在来種と置き換えるとしても、どの種に置き換えるかが問題である。
- ・特定外来生物として1996年に日高地方へ、2004年に野幌周辺に入ってきた。
- ・セイヨウオオマルハナバチは口が短いので、蜜腺が長い植物には、横から穴を開けて蜜を吸うため、花粉を運ばない。一方、エゾナガマルハナバチは口が長いので花粉を運ぶが、もしエゾナガマルハナバチがいなくなると、受粉できなくなる。セイヨウオオマルハナバチは農耕地や林縁のハチと思っていたが、森林の中にも見られるようになった。台風の影響の裸地に入り込んでいる。
- ・マルハナバチは、それぞれの種が特定の植物の花と密接な関係を築いている。セイヨウオオマルハナバチはその関係を壊し、植物の繁殖に悪影響を及ぼす恐れがある。
- ・在来種のマルハナバチは地域で遺伝的な固有性を持っているが、それが交雑によって破壊される可能性がある。セイヨウオオマルハナバチとクロマルハナバチとの交雑により、雑種ができることが確認されている。

○ドーダーの絶滅とカルバリア

- ・ドーダーはマダガスカル沖のカナリア諸島に住む飛べないハト目の鳥である。
- ・カルバリアはアカソテツ科の皮の厚い木の実がなる植物で、ドーダーが木の実を食べることによって繁殖していた。ドーダーの絶滅とともに、新しい木が増えていない。

○スイセンハナアブ

- ・ヨーロッパ原産で、野幌周辺にも近年定着している。

○オオタコゾウムシ

- ・クローバーとともにいる。パークゴルフ場の芝と一緒に広がっている。

○キンケクチブトゾウムシ

- ・北海道では雌のみ生息している。単位生殖をするので、増殖のスピードが速い。

○カブトムシ

・1970年代以降、旭川市周辺や網走市等、寒い地域に発生している。酪農家の堆肥の中で繁殖している。近年、札幌市内でも見られるようになった。自然環境、自然状態で越冬している。

○外来生物による被害を防止するための注意点

- ・「入れない」「捨てない」「広げない」ことが必要である。

○水の中も大きく変わってきている北海道

- ・北斗市にある八郎沼の観察結果では、アメリカザリガニやウシガエルが見られ、本州のようになってきている。野幌でもミシシippアカミミガメ、ツチガエル、ヒキガエル、カムルチー等が見られる。

○アライグマは何を食べているのか

- ・アライグマは指が長いのが特徴で、気性が荒い。1979年に恵庭市から逃亡し、現在は北海道全域で見られる。
- ・何を食べていたのか調べてみると、植物のほか、節足動物が多いことが分かった。スズメバチを巣ごと食べている例も見られた。スズメバチは捕食者であり、昆虫の数をコントロールしているので重要な昆虫であるが、アライグマのためにスズメバチが減少するのは問題である。
- ・オニヤンマ、オオルリオサムシ、マイマイカブリ等は、水辺で捕食している。2mm～3mm程度に細かくかみ砕いている。7割が森林の昆虫で、2割が水辺の昆虫で、1割が畑や草地の昆虫である。
- ・飛べないもので、色が付いているものを食べている傾向がある。
- ・普段は森の中で暮らしているが、エゾサンショウウオが食べられていた。尻尾は嫌いであるようで、いろいろな場所で食べ残されている。

○移入種問題

- ・一部で新しい種が増えるから良いのでは？との考えがあるが、消える種が出てくる。消えた種は二度と復活しない。長い地史的な年月でできあがった生物相が一瞬で崩壊することになるので、大きな問題である。他所からの移入では全体の種は増えない。トータルでは減少する。

○交雑による在来種の消滅危機

- ・鍵種が無くなることから生態系の危機が生じる。交雑により遺伝子汚染が起こり、在来種が消滅する恐れがある。

【生物多様性とは】

生物群集の多様性を考えると、「種類数」「均衡度」「系統的距離」という3つの多様性の比較がある。

では、多様性が高い場所はどこか？世界中を見回すと、低緯度の熱帯雨林で非常に高い。北海道においても、南に行くほど高い傾向が見られる。海岸、山、川、湿原等、環境の多い場所ほど高い。

中米パナマのシナノキ科の1種類の樹冠から1,200種類の甲虫が見られ、その寄種特異性を13.4%と推定し、熱帯樹の種類を50,000種類、甲虫のうち節足動物の割合を4割、樹冠に生息する種が森林全体の2/3と推定すると、3,085万種類となる。世界の節足動物は約3,000万種類ということである。

ヨーロッパの昆虫図鑑を見ると、図は同じで言語がその国で書かれたものが多い。例えば、ドイツとイギリスは生物相が同じということである。

一方、日本の図鑑は地方毎にある（札幌、沖縄、九州の図鑑を紹介）。これは、その土地にいる生き物が違うことを示している。

多様性の維持のためには、「土地利用の固定化を少しでも和らげる」「外来種を増やさない」「ホットスポットを保全すること」が必要である。

【おわりに】

その土地の生物相と生物が暮らせる自然環境を残すことが生物多様性の保全には必要である。

【質疑・応答】

Q：個人的な見解でも結構だが、保全・回復の目標はどこにあるのか？北海道では、倭人が入る前と
言われているが。

A：モデルになる環境を考える。現在、野幌の森林を調べているが、平地林の理想的なバランスや組
み合わせを探っている。

Q：私は虫の生態観察がキチガイと言われるほど好きだったが、今の親は「役に立たないので別の勉
強をしなさい」と嫌ったり、子どもも子どもらしい興味が無くなってきたのは残念である。この
ような傾向は、生態系にとってマイナスではないか。どうしたら虫好きにさせることができるの
か。

A：私の親も心配していた。昆虫は、最初に子供が触れたり見たりできる自然観察の扉である。周囲
のフォローが大切である。確かに、親や学校が離す方向であったが、最近、少し方向が変わって
きた。現在の父親世代は虫が好きな世代になってきた。そのため、子どもを連れて外に行くよう
になってきた。名前を知らないが無関心になってくる。そうならないように、図鑑や指導者が必
要である。指導はとても大切である。私自身、まだ全体の1割も知らない。ただ、質問の8割～
9割がその1割に該当する。分かる人を増やし、子どもたちに教えていくのがこれからの課題で
ある。

12：10～12：30

講義「環境カウンセラー登録制度について」 ※新規登録者のみ

環境省北海道地方環境事務所 環境対策課企画係長

今村 和典 氏

【内容】

- (1) 環境カウンセラーとは
- (2) カウンセリング活動の流れ
- (3) 環境カウンセラー登録者検索について
- (4) 環境カウンセラーに期待される役割
- (5) 登録後の手続について
- (6) 登録後にやらなければならないこと
- (7) 活動実績等報告書の提出先
- (8) カウンセラーの方へのお知らせなど
- (9) 環境カウンセラーメールニュースについて
- (10) 活動紹介について
- (11) 問い合わせ先
- (12) 制度説明のおわりに



13:20~15:20

グループディスカッション

「生物多様性について、環境カウンセラーとしてどう伝えていくか」

進行 NPO 法人北海道環境カウンセラー協会 副会長 吉迫 勝意

1 グループ 10 名前後に分かれ、それぞれファシリテーターによる進行の下、以下のテーマに沿って議論を進めた。各グループの議論の要点及び発表内容は以下のとおりである。

なお、発表内容については KJ 法により図解化し、22 ページから 25 ページに掲載している。



第1グループ「私たちの生活を通してできる生物多様性保全」

ファシリテーター：横山 武彦 (NPO 法人北海道環境カウンセラー協会 副会長)

メンバー：竹林 祐子、高橋 俊男、中田 光治、藤田 郁男

岡崎 朱実、フェルスト・ビルギット・ビアンカ

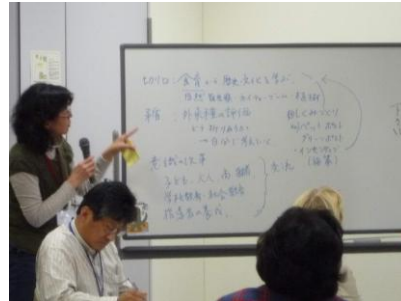
福士 正明、山口 和男

(発表者：中田 光治、岡崎 朱実)



このグループでは、生物多様性について 2 つの切り口から議論した。1 つは「生活を通して生物多様性に個人として何ができるか」ということと、もう 1 つは「できたこと、したいことを環境カウンセラーとしてどう伝えていくか」ということである。

まず、個人としてできること、してきたことをそれぞれの体験からリストアップした。それを基に、環境カウンセラーとしてどう伝えるかを議論した。



第2グループ「企業として生物多様性にどのように取り組むべきか」

ファシリテーター：尾崎 耕策（NPO 法人北海道環境カウンセラー協会 会長）

メンバー：稲井 昭紀、駒込 幸男、佐藤 二三男、高橋 修治

橋本 昭夫、岡野 裕幸、盛本 秀喜

（発表者：岡野 裕幸）

このグループでは、企業におけるそれぞれの取組を紹介した後、環境カウンセラーとして果たすべき役割について議論した。



なお、メンバー間で以下の質疑・応答があった。

Q：企業のリスクマネジメントについて説明してほしい。

A：企業活動をしている上で、リスクマネジメントが必要である事例として、トヨタがテストコースを造った際に絶滅危惧種がいたことから、コースを縮小し、田んぼを作ったことがある。



第3グループ「地球温暖化がもたらす生物多様性への影響」

ファシリテーター：東 靖友（NPO法人北海道環境カウンセラー協会 理事）

メンバー：関尾 憲司、吉迫 勝意、福士 充、葛谷 和博、牧 賢吾

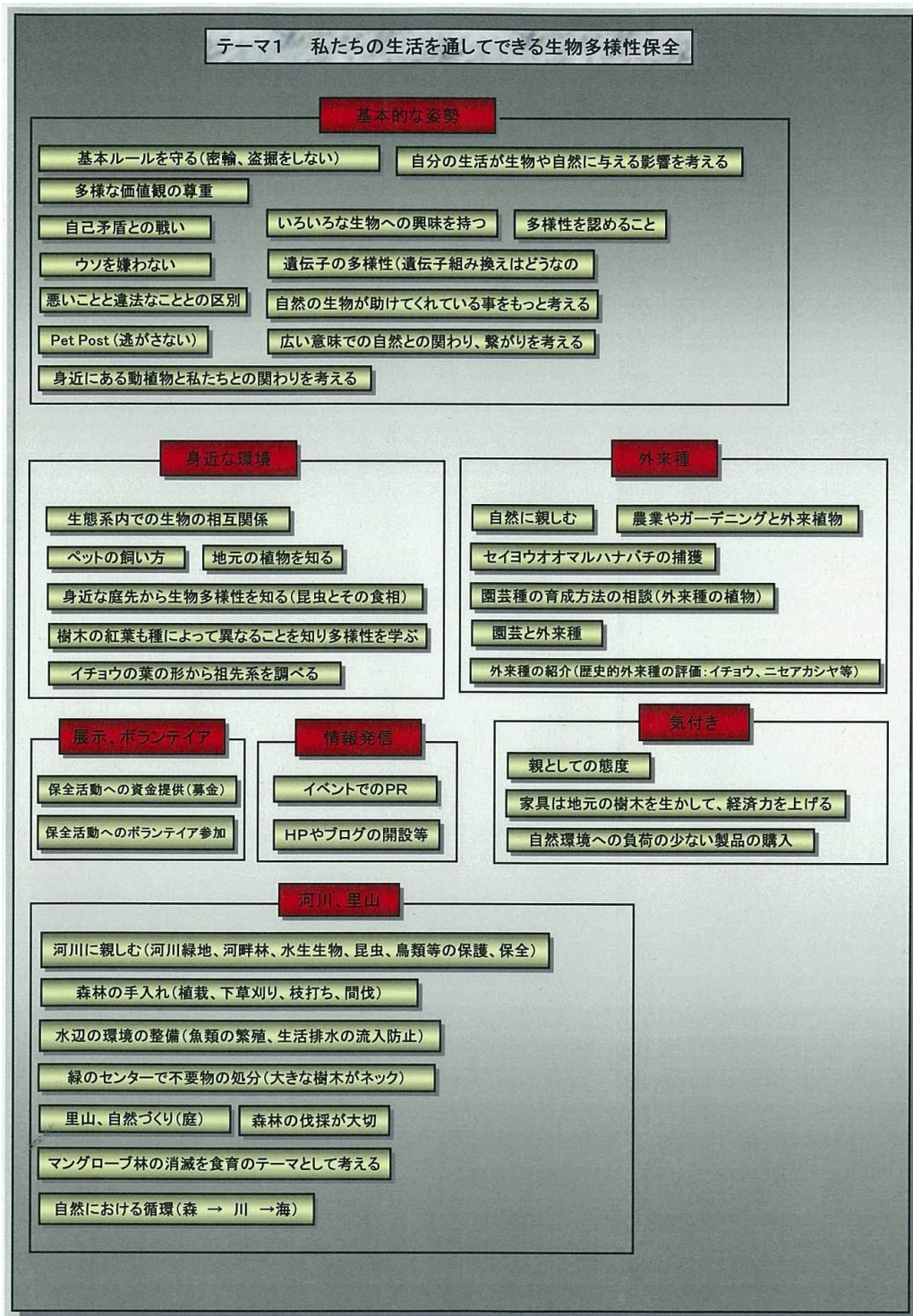
藤田 佳久、稲葉 秀一、中埜渡 丈嘉、浜田 拓

（発表者：牧 賢吾）

このグループでは、「地球温暖化」という切り口から生物多様性について考え、環境カウンセラーという立場から、関わりや重要性等をどう伝えていくか議論した。



K J 法図解 第1グループ「私たちの生活を通してできる生物多様性保全」



環境教育

学生に対する体験学習、環境学習の実践

ドイツでは幼稚園から環境教育を教えている

ビオトープ作り、アスファルトの取り出し

情報の充実(外来種の意識)

活動を通じた交流

森づくりに積極的に参加

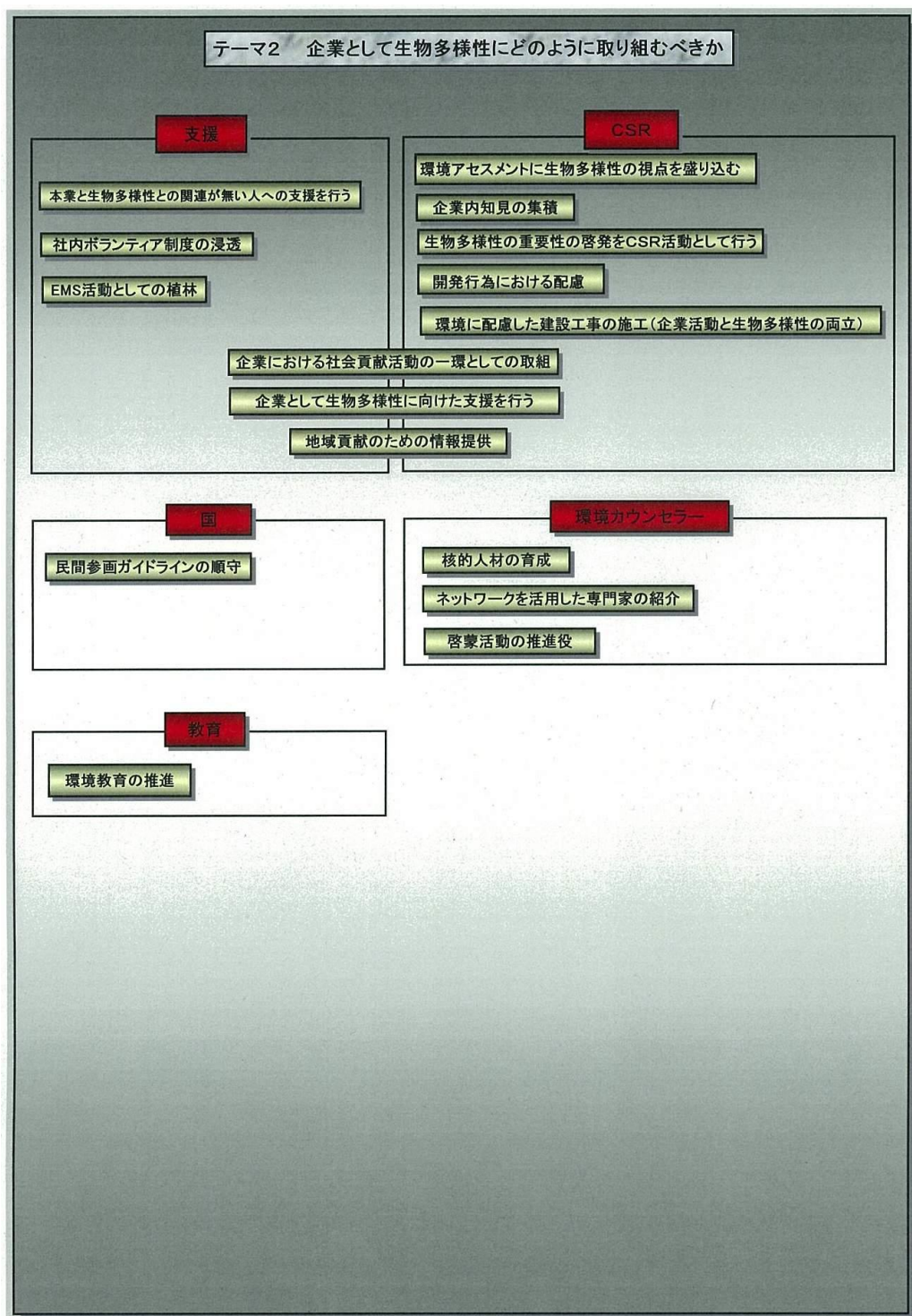
意識付け(外来種と地元の種の区分できる知識を持つ)

道民1人ドマツ30本植樹運動への参加

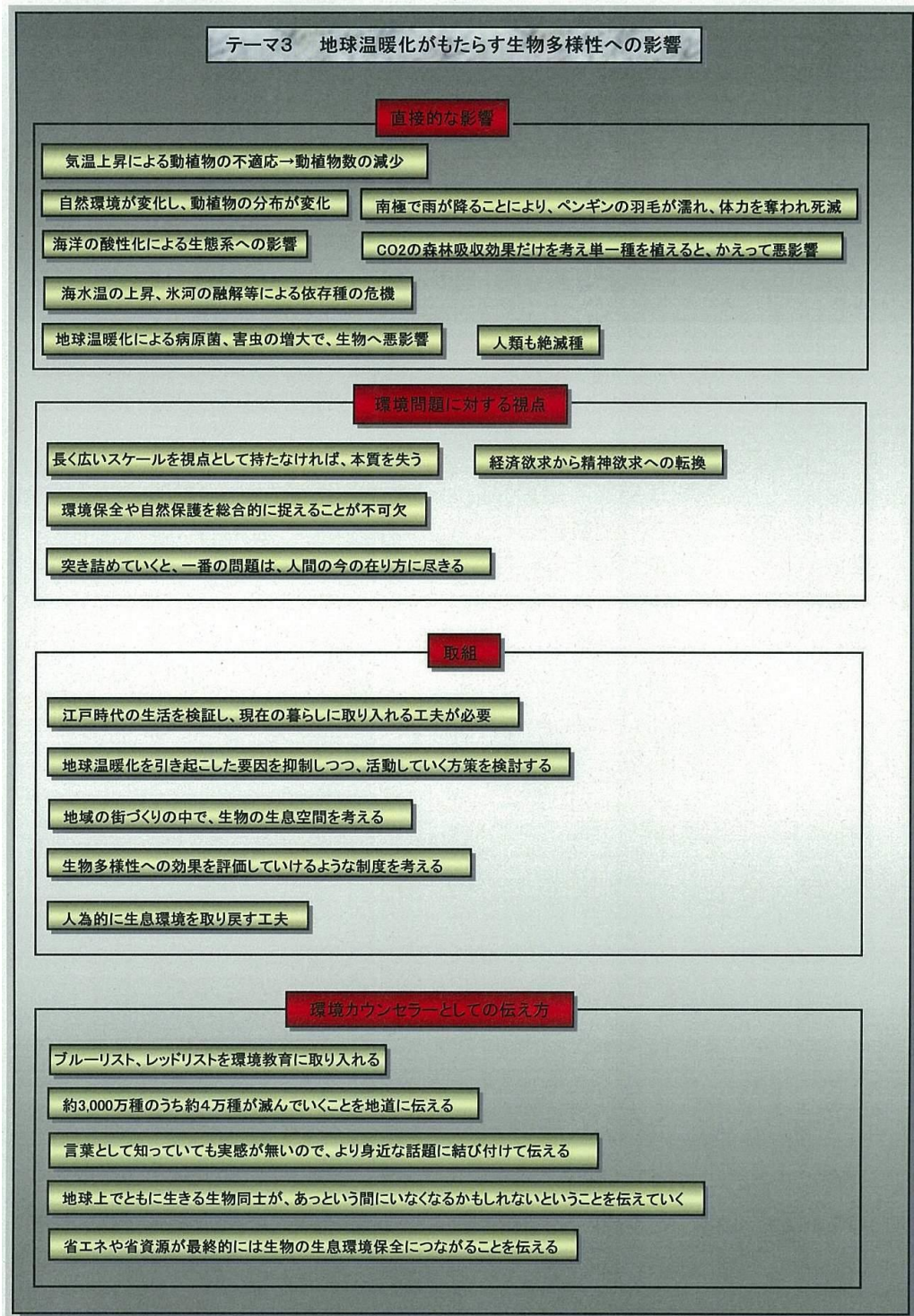
近所でまずやってみること

継続することが大切

K J 法図解 第2グループ「企業として生物多様性にどのように取り組むべきか」



K J 法図解 第3グループ「地球温暖化がもたらす生物多様性への影響」



講評

オフィスmalma 代表（本業務検討会委員）
長谷川 雅広 氏

【要旨】

各テーブルで議論を聞いた。勉強になった。ビオトープ施工管理士の経験を有し、自治体からの依頼で仕事をしている。

北海道内の事業者にとっては、給料が第一であることはよく分かるが、CSRが足かせになっている。

生物多様性に関する取組は、レベルの低いところから始めることを提案したい。例えば、原料調達の手段を必要最小限にするだけでも、二酸化炭素の排出抑制につながり、それは同時に生物多様性保全にもつながるのである。

生物多様性保全というと、とかく自然一辺倒になりがちであるが、社会的・経済的アプローチも必要である。そのためには、動機付けとしてのテクニックを身に付ける必要がある。



【質疑・応答】

Q：今のお話の中で、具体的な例があれば教えていただきたい。

A：公園等での植栽で、今まで、施肥や人工的に管理していたものを、共生菌を活用することでより自然に近い状態で育てるようにする。また、慣行農業ではなく、ハーブなどを活用して自然農法にする。そうすると、歩留まりが悪いのが一般的だが、2年で慣行農法と同じくらいに戻っているところもある。「生物多様性に配慮したお米」ということで付加価値を付ける。これは、費用便益の手法を用いている。ルートも提案した。最近、支持するユーザーも増えてきている。経営者も上の段階に行こうとしている。少しずつではあるが、ビジネスとして回ってきている事例が出てきている。

16：25～16：30

アンケートの記入

16：30～16：45

閉会式＜修了証交付＞

全課程修了者 27名

受講者代表 山口 和男 氏

16：45

終了、解散



(5) 第2回検討会の開催

◆日時：平成21年11月20日（金）13：30～16：00

◆場所：環境省北海道環境パートナーシップオフィス（EPO 北海道）

◆出席者：（敬称略）

（検討委員）内山 到（財団法人北海道環境財団 情報交流課長）

宮本 尚（NPO 法人北海道市民環境ネットワーク）

長谷川 雅広（オフィス malma 代表）

（主催者）安田 将人（環境省北海道地方環境事務所環境対策課 課長補佐）

今村 和典（環境省北海道地方環境事務所環境対策課 企画係長）

（事務局）藤田 郁男（NPO 法人北海道環境カウンセラー協会 顧問）

尾寄 耕策（NPO 法人北海道環境カウンセラー協会 会長）

横山 武彦（NPO 法人北海道環境カウンセラー協会 副会長）

岡崎 朱実（NPO 法人北海道環境カウンセラー協会 理事）

座長を当協会の尾寄に決定し、検討会を進行した。

◆議題：平成21年度環境カウンセラー研修のふりかえり

①主催者挨拶（要旨）：環境省北海道地方環境事務所環境対策課 安田課長補佐

アンケートを見ると、充実した内容で参加者の満足度は高かったものと思われる。次年度の研修をどのように実施したら良いかも含め、検討してほしい。

②本研修のふりかえり

(i) 事務局から開催概要の説明

全体としてはほぼスケジュール通りに進行できた。今後、講師から提供いただいたパワーポイント資料や本日の検討会の内容を含め、実績報告書を完成させていく。

(ii) アンケート結果の報告

受講者は27名（市民部門 11名、事業者部門 15名、両部門 1名）であった。

参加目的としては、「スキルアップのため」が13名で最も多く、次に「最新情報入手のため」が10名であった。

研修プログラムについては、いずれも「良かった」という評価が多かった（詳細は、巻末資料4「受講者アンケート集計結果」を参照のこと）。

次年度の希望テーマについては、主に以下の4つが挙げられた。

- ・生物多様性
- ・地球温暖化防止
- ・環境教育
- ・事例紹介

○生物多様性について

- ・次年度の開催時期は本年度と同じか？ そうだとすれば、COP10の結果も出ているのではないか？
- まだ、そこまでは分からない。まずは、COP10を無事に終えるのがポイントである。国内の動きをどれだけ盛り上げていけるかが今は問題である。
- ・民間参画ガイドラインの次の一手はあるのか？ 一般市民と比べ関心の高いカウンセラーでも、あまり知らなかった。何か対策が必要ではないか？

○地球温暖化防止について

- 北海道で新たな計画を作っているところである。議題にできるのではないか？
- 北海道の取組が充分かどうか、そうでないのならどのようなことが必要かを考えてはどうか？
- いろいろなアプローチがあることを知り、それぞれができることを考えると良いのではないか？
- 地球温暖化防止というテーマは他の場所でも講演会等を開催していて、話を聞く機会があるので、研修であえて実施しなくても良いのではないかと思う。

(iii) 本研修をふりかえってフリーディスカッション

出席者から、本研修における感想、意見、疑問点等を挙げていただいた。

○全体講演について

- ・全体講演が、とても良かったとの評価の理由は何か。
- 今回はテーマを「生物多様性」に絞り、講師に対し事前に伝えたことが「良かった」とする理由の1つではないかと思う。今までは漠然と「環境行政の動向」となっていたため、講師も絞りにくかったのかも知れない。今回は、全体講演→基調講演→分科会と、テーマが一貫していた点も良かったのではないかと思われる。
- ・今までテーマを絞って良いのかどうか迷ってきたが、絞った方が良いものと思われる。また、北海道に絞った点も良かったと思う。

○グループディスカッションについて

- ・全体的に、まとまりがなかったという印象を受けている。
- ・KJ法をもっと学ぶべきだと感じた。
- (KJ法のやり方として) 似通ったグループに分けていくということを知らない人が多かったのではないか？
- ・フリートークに走る人が多かった。
- ・もっとファシリテーターが仕切っても良かったのではないか？
- ・何のためのワークショップだったのか。目的が理解されていなかったのではないか？
- ・グループ内で、受講者それぞれの活動を確認することができた。一般論の「カウンセラーとしてどうすべきか」ということに落とし込むことはできなかったが、それぞれの取組が興味深く、各受講者が今後のカウンセラー活動に生かすことができる内容だったのではないかと思う。参加者の満足感は、第1グループにはあったと感じる。
- ・企業として何をやるかははっきりしている。結論も「環境カウンセラーとしてはあまりできない」

ということで、はっきりしている。せいぜい学習会での啓蒙程度ではないかと思う。民間参画のガイドラインを知っている人は、第2グループではいなかった。環境省としては、ガイドラインを作ってそれで終わりということではなく、企業に対しガイドラインをいかに周知徹底させていくかが今後必要であり、環境カウンセラーがその任に当たるべきである。

- ・ミティゲーションは確立された手法なのだが、第2グループではそれに言及することが無かった。
- ・コンサルタントを業務としている者は、それでお金を貰っているので、結果を出すために当然やっている。どこが落としどころか悩んでいるようである。
- ・第3グループについては、比較的スジがはっきりしているので、やりやすかった面がある。
- ・グループディスカッションがマンネリ化しているのも、改善の必要があるのではないか？
- ・課題解決は、短時間ではできないことである。各カウンセラーがどのようなポジションにいたかがよく分からない。それぞれがどのポジションで、どのようにすれば良いのかが明確になれば良かったと思うが、その点はどうだったのか。

→交流、情報交換という面では、ある程度得るものがあつたのではないかとと思われる。

- ・講演の情報と、自身の活動をドッキングしながらのプログラムで、得るものがあつたと思う。
- ・そもそもグループディスカッションの何がマンネリなのか。毎年やっているからか？

→構成自体はここ何年か変わっていないので、構成は変わってもいいかもしれない。

(実地研修などがあつても良い？)

- ・どこまで求めてよいのか？協働まで求めているのか？

→情報共有の手段ではないか。

- ・気付きの場として、テーブルワークは必要である。
- ・受講者のアンケート結果からはマンネリ化との批判はなく、満足度は高いようである。
- ・グループディスカッションのマンネリ化対策としてどういったことができそうか。

→グループディスカッションに、メディアやNPO、高校生など、第三者を入れてはどうか。

→環境カウンセラー自身がファシリテーターを行うのではなく、第3者のファシリテーターを入れると良いかも知れない。

→事業者部門、市民部門が、テーマ毎に固まってしまった感がある（受講者の希望を取り入れているので当然であるが）。事業者部門の議論に市民部門が入り、そこからの疑問を通して新しい気付きが生まれるのではないか？

→あえて希望を聞かずにグループ分けするのも1つの方法である（不満が残るのでは？との指摘有り）。

→途中で構成メンバーを変える、ワールドカフェの方式をとってみるのも1つの方法である。

○研修の目的について

- ・環境カウンセラー研修は、何を指しているのか？
- ・環境カウンセラーに対する期待と能力がマッチングしていない。様々なレベルの人がいるので最低レベルの人が1ランク上がる程度のことしかできないのではないか。
- ・環境カウンセラーには、それぞれのエキスパートがいる。違う分野の知識を得ることで、気付きがある。自分自身の底辺を上げることになる。相対的なスキルアップになると思う。
- ・レベルアップとは、底上げでスキルアップして、均一化することなのか？

→それは難しいと思う。

○受講者を増やす方策について

- ・89名の環境カウンセラーのうち、約1/3しか受講していない。また、受講者が固定化している。原因はメリットが無いからなのか？日程的なものか？地理的なものか？プログラム内容がつまらないからか？原因の追究が必要である。
- 欠席者からアンケートを取る等の方法により把握する？
 - ・環境カウンセラー登録制度自体が曖昧である。
- 他の国家資格であれば、必ず研修がある。少なくとも環境行政については毎年変わるので、「毎年受講しなくてはならない」とすべきである。
- 市民と事業部門は、そもそもの目的が異なっている。
 - ・環境省の施策について、環境カウンセラーと環境省関係者とのディスカッションとしてはどうか？
- それよりも個々の環境カウンセラーのスキルアップの方が必要である。
 - ・それぞれが何をやっているかを知り、研修の場で評価する仕組みができれば良いのではないか。また、活動実績等報告書を出してもらってはどうか？
- 活動実績等報告書の提出は毎年行っているが、評価するものとはされていない。活動範囲の広さやおおまかな活動が分かる程度である。利用の仕方次第と言える。
- 環境カウンセラーのホームページの中にあるが、あまり機能していない。
- メールニュースが始まったので、その活用も1つの方法である。
- 当協会の機能の中であれば良いかもしれない。
 - ・遠方の環境カウンセラーは、報告者ということで旅費の支給を考慮することも考えられる。
 - ・当協会での活動交流会とドッキングさせると良いかもしれない。
 - ・遠隔地からのWebを活用した受講は仕組みとして可能か？
- ネット中継等により、地方でも受講できるような仕組みもできるかもしれない。地域の拠点施設との連携もできる。検討の余地がある。
 - ・過去に受講してつまらなかったもので、またつまらないだろうと感じて、受講しないことも考えられる。内容を伝える仕組みがあると良いのではないか？
- 講演録は、カウンセラーには提供できる。(講師の確認を得てからであるが)

(6) 本業務の総括

以上、業務仕様書に基づき、平成 21 年度環境カウンセラー研修の企画・運営等を実施したところであるが、当協会において本研修実施に係る総括を次のように取りまとめた。本研修の次年度以降の実施に当たり、参考になれば幸いである。

- ①基調講演の講師選定は、前年度中に日程・内容等、概要を絞り、推薦候補を当たっておく必要がある。今回、講師候補を選定するに当たり、検討委員の多様な環境保全活動の経験から多くの人材を推薦いただいたことは、環境カウンセラー活動をする上で今後の大きな財産になった。次年度も生物多様性がテーマになる可能性が大きいため、参考となるものと思われる。
- ②グループディスカッションではKJ法の基本的な説明が必要であるとの意見があった。プログラムに入れることを次年度検討していきたい。
- ③グループディスカッションではマンネリ化しているとの意見があったので、ファシリテーターを外

部から招く等により、変化をもたせたい。グループの編成にも工夫が必要であろう。

- ④研修会場は札幌市環境プラザを利用したが、講師控室も設けることができ、大変スムーズな運営をすることができた。
- ⑤全体講演、基調講演ともに講師が好評であったので、受講者には満足していただけたものと思われる。推薦いただいた検討委員の方に感謝する。

卷末資料

資料 1 配布資料

資料 2 講演資料

資料 3 受講者アンケート

資料 4 受講者アンケート集計結果

平成 21 年度環境カウンセラー研修



目 次

平成 21 年度環境カウンセラー研修スケジュール(北海道地区).....	1
受講者名簿.....	2
基調講演者プロフィール.....	3

【別紙】

全体講演

「環境行政の動向について」

(環境省北海道地方環境事務所 統括自然保護企画官 坂本 真一)

基調講演

「北海道の生物相と生物多様性」

(北海道開拓記念館 資料情報課長・学芸第一課長 堀 繁久 氏)

講義

「環境カウンセラー登録制度について」

(環境省北海道地方環境事務所 環境対策課企画係長 今村 和典)

環境カウンセラー研修アンケート

平成 21 年度環境カウンセラー研修スケジュール(北海道地区)

11月6日(金) 札幌市環境プラザ 環境研修室 1・2

午 前 の 部	10:00～ 10:10 (10分)	開会式・オリエンテーション 主催者挨拶 環境省北海道地方環境事務所 統括環境保全企画官 竹安 一		
	10:10～ 10:40 (30分)	全体講演 「環境行政の動向について」 環境省北海道地方環境事務所 統括自然保護企画官 坂本 真一		
	10:40～ 12:10 (90分) ※途中休憩 5分含む	基調講演 「北海道の生物相と生物多様性」 北海道開拓記念館 資料情報課長・学芸第一課長 堀 繁久 氏		
	12:10～ 12:30 (20分)	昼食・休憩 (新規登録者以外)	講義 「環境カウンセラー登録制度について」 環境省北海道地方環境事務所 環境対策課企画係長 今村 和典	
	12:30～ 13:20 (50分)		昼食・休憩	
午 後 の 部	13:20～ 15:20 (120分)	グループディスカッション 「生物多様性について、環境カウンセラーとしてどう伝えていくか」		
		テーマ1: 「私たちの生活を通してできる生物多様性保全」	テーマ2: 「企業として生物多様性にどのように取り組むべきか」	テーマ3: 「地球温暖化がもたらす生物多様性への影響」
	15:25～ 16:25 (60分)	休憩(5分間)		
		グループディスカッションの発表 各グループによる発表(質疑を含めて20分)		
	16:25～ 16:45 (20分)	アンケートの記入 閉会式<修了証交付>		
	16:45	解散		

受講者名簿

登録番号	部門	氏名	フリガナ	出席	ディスカッション	市町村	備考
1996101005	事業者	関尾 憲司	セキオ ケンジ	○	テーマ3	帯広市	
1996101007	事業者	長澤 幸雄	ナガサワ ユキオ	×	テーマ1	札幌市	
1996101011	事業者	吉迫 勝意	ヨシザコ カツイ	○	テーマ3	苫小牧市	ファシリテーター
1996201007	市民	竹林 祐子	タケバヤシ ユウコ	○	テーマ1	札幌市	
1997101002	事業者	福士 充	フクシ ミツル	○	テーマ3	北見市	
1997201002	市民	高橋 俊男	タカハシ トシオ	○	テーマ1	札幌市	
1998113003	事業者	中田 光治	ナカタ コウジ	○	テーマ1	札幌市	市 2005201002
1998201001	市民	藤田 郁男	フジタ イクオ	○	テーマ1	札幌市	
1999201001	市民	岡崎 朱実	オカザキ アケミ	○	テーマ1	江別市	
2000101002	事業者	小林 正直	コバヤシ マサナオ	×	テーマ3	札幌市	市 2000201002
2001101003	事業者	尾崎 耕策	オザキ コウサク	○	テーマ2	札幌市	ファシリテーター
2001101007	事業者	東 靖友	ヒガシ ヤストモ	○	テーマ3	千歳市	ファシリテーター
2001201005	市民	横山 武彦	ヨコヤマ タケヒコ	○	テーマ1	江別市	ファシリテーター
2002101001	事業者	稲井 昭紀	イナイ アキノリ	○	テーマ2	札幌市	
2002201004	市民	フルスト ビルギット ピアンカ	フルスト ビルギット ピアンカ	○	テーマ1	札幌市	
2003101003	事業者	駒込 幸男	コマゴメ ユキオ	○	テーマ2	帯広市	
2003101004	事業者	佐藤 二三男	サトウ フミオ	○	テーマ2	札幌市	
2003101005	事業者	高橋 修治	タカハシ シュウジ	○	テーマ2	札幌市	
2003201004	市民	葛谷 和博	クズタニ カズヒロ	○	テーマ3	帯広市	
2004201003	市民	福士 正明	フクシ マサアキ	○	テーマ1	岩見沢市	
2005201004	市民	牧 賢吾	マキ ケンゴ	○	テーマ3	伊達市	
2006101001	事業者	橋本 昭夫	ハシモト アキオ	○	テーマ2	札幌市	市 2006201002
2006101002	事業者	藤田 佳久	フジタ ヨシヒサ	○	テーマ3	札幌市	
2007101001	事業者	稲葉 秀一	イナバ シュウイチ	○	テーマ3	江別市	
2007101002	事業者	岡野 裕幸	オカノ ヒロユキ	○	テーマ2	札幌市	
2008101001	事業者	中埜渡 丈嘉	ナカノワタリ タケヨシ	○	テーマ3	札幌市	新規登録者
2008101002	事業者	浜田 拓	ハマダ ヒラク	○	テーマ3	札幌市	新規登録者
2008101003	事業者	盛本 秀喜	モリモト ヒデキ	○	テーマ2	札幌市	新規登録者
2008201002	市民	山口 和男	ヤマグチ カズオ	○	テーマ1	札幌市	新規登録者

基調講演者プロフィール

堀 繁久（ほり しげひさ）

北海道開拓記念館 資料情報課長・学芸第一課長

【略歴】

1961年札幌市生まれ。琉球大学理学部生物学科卒業。（財）開拓の村、北海道環境科学研究センター研究職員を経て現職。現在の研究テーマは、野幌森林公園の生物インベントリーの解明、孤立林の地表性甲虫群集の特性解明。

著書：探そう！ほっかいどうの虫（北海道新聞社） 沖縄昆虫野外観察図鑑（共著）（沖縄出版）

環境行政の動向について

生物多様性の視点から

1) 生物多様性とは・・・

3つの多様性

- ・
- ・
- ・

2) 生物多様性の危機

第1の危機

第2の危機

第3の危機

4つめの危機（第3次生物多様性国家戦略に盛り込まれた）

3) 生物多様性のめぐみ（生態系サービス）

①生きものが支える大気と水

②暮らしの基礎

③生きものの文化の多様性

④自然に守られる私たちの暮らし

4) 生物多様性に関する国内外の動き

①生物多様性の歴史

②生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）

2010年10月18日（月）～29日（金）

名古屋国際会議場（愛知県名古屋市）

5) 生物多様性の危機に立ち向かう

地球のいのち、つないでいこう



生物多様性

『北海道の生物相と生物多様性』

— 堀 繁久 (ほり・しげひさ) —
北海道開拓記念館学芸員



生物相と生息環境の変遷を三つの時間スケールで見してみる！！

◆ 地史的時間スケール

生物の分布と境界線（ブラキストン線ほか）。
日本列島の成り立ち（大陸島と海洋島）。
見直される生物地理学（Biogeography）
所変われば生き物変わる。
日本列島のカエルいろいろ。
北海道のヒグマ集団の三重構造。

◆ 歴史的時間スケール

草原と河畔の昆虫が、急速にいなくなってきている。
一頭の古い札幌産“アサマシジミ”の標本。
“ゲンゴロウ”見たことありますか???
消えた、孤立林の森林性オサムシ。

◆ 現代の時間スケール

アライグマは何を食べている？
水の中も大きく変わってきている北海道。
セイヨウオオマルハナバチだけではない外来昆虫。
ダイコクコガネはなぜなくなったのか？

◆ 生物多様性について

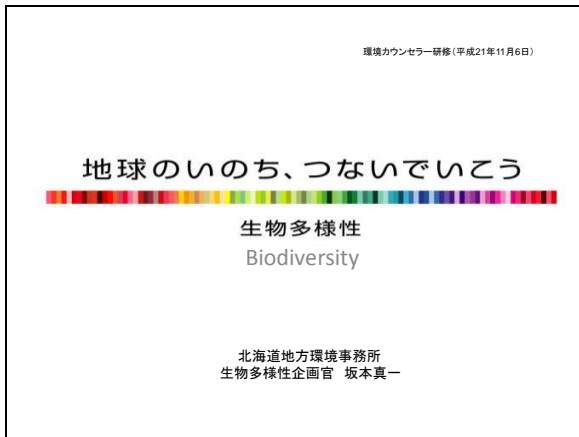
生物多様性って、何なのだろう？
世界で、地元で一番多様性の高い場所は？
ヨーロッパの昆虫図鑑と日本の昆虫図鑑。
生物多様性を維持するにはどうすれば良いのか。

これからは、小さな虫にも、ぜひ興味を持ってみてくださいね♪♪



資料 2

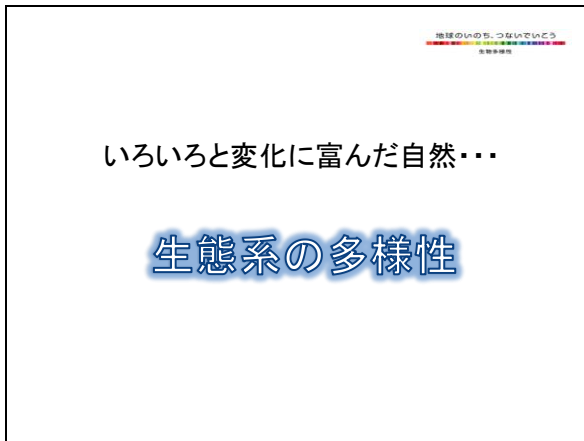
スライド 1



スライド 2



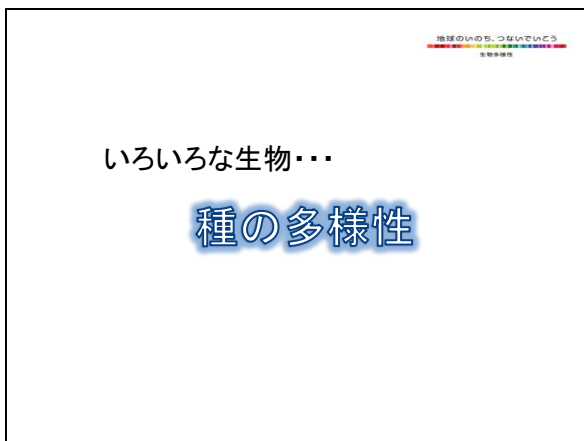
スライド 3



スライド 4



スライド 5



スライド 6



スライド7

地球のいのち、つないでいこう
生物多様性

個性あふれる種
遺伝の多様性

スライド8

地球のいのち、つないでいこう
生物多様性

3つの多様性

- ①生態系の多様性
- ②種の多様性
- ③遺伝の多様性

スライド9

地球のいのち、つないでいこう
生物多様性

生物多様性の危機

第1の危機
人間の活動や開発による影響
開発や乱獲など、人間活動による種の減少、
生息生育域の減少。



北海道では
開発
湿地の減少・・・サロベツ原野、釧路湿原
森林の減少・・・シマフクロウの生育
盗掘・乱獲(シブヤツツメリ、ヒダカソウ、
タンチョウなど)
etc.

スライド10

地球のいのち、つないでいこう
生物多様性

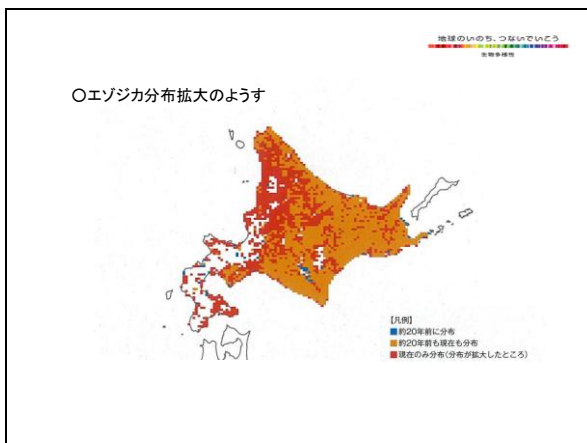
生物多様性の危機

第2の危機
人間活動の縮小による質の低下




北海道では
若い手の減少・高齢化による耕作放棄地の増加
エゾジカの増加による森林被害
etc.

スライド11




スライド12

地球のいのち、つないでいこう
生物多様性

生物多様性の危機

第3の危機
外来種や化学物質による影響
もともとその地域に生育しない生物の増加や
化学物質による生態系への影響



北海道では
外来種
アライグマ、ミンク、セイヨウオオマルハナバチ
ウチダザリガニ、オオハシゴンソウ、大金鶏菊、
カナダモ など(特定外来生物)
その他にも
カブトムシ、ミドリガメ、ゴキブリ ……
環境汚染(かつての豊平川)
洞窟湖の酸性化
etc.

スライド13

地球のいのち、つないでいこう
生物多様性

生物多様性の危機

あらたな危機
地球温暖化による危機



北海道では
流水の消失？
漁獲高の変化、アザラシの行動変化
高山植物の減少・植生変化
大雪山、アポイ岳、川満つづじが原
etc.

スライド14

地球のいのち、つないでいこう
生物多様性

生物多様性のめぐみ

生態系サービス

①生きものが支える大気と水



植物が酸素を生み出し、森林が水循環のバランスを整えるなど、生きものの営みによって、我々人間を含むすべての生命の生存基盤である地球環境が保たれます。

スライド15

地球のいのち、つないでいこう
生物多様性

生物多様性のめぐみ

生態系サービス

②暮らしの基礎



毎日の食卓を飾る米や野菜や魚等は野生生物を改良あるいは直接利用します。新聞や本などの紙製品は、植物から作られます。様々な医薬品も生物の働きを利用して開発されます。

スライド 16

地球のいのち、つないでいこう
生物多様性

生物多様性のめぐみ

生態系サービス

③生きものと文化の多様性



南北に長い国土を有し、季節の変化に富み、地域ごとに多様な動植物が見られる日本の自然。こうした自然と一体となって、日本の地域色豊かな伝統文化がはぐくまれてきました。


スライド17

地球のいのち、つないでいこう
生物多様性

生物多様性のめぐみ

生態系サービス

④自然に守られる私たちの暮らし



森林や河川湖沼の保全是、生きものを守ると共に、安全な飲み水の確保や、山地災害の軽減、土壌の流出防止など、安心できる居住環境の確保につながります。

スライド18

地球のいのち、つないでいこう
生物多様性

生物多様性に関する国内外の動き(1)

	世界	日本
1971	ラムサール条約採択	
1972	世界遺産条約採択	自然環境保全法制定
	国連環境計画発足	
1973	ワシントン条約採択	
1975	ラムサール条約発効	
	ワシントン条約発効	
1980		ラムサール条約批准
		ワシントン条約批准
1987		種の保存法制定
1992	生物多様性条約採択	ワシントン条約京都会議
	地球サミット開催	世界遺産条約批准
	地球変動枠組条約採択	

スライド19

生物多様性に関する国内外の動き(2)

	世界	日本
1993	生物多様性条約発効	生物多様性条約受諾 ラムサール条約締結会議
		環境基本法制定
1994		環境基本計画策定
1995		生物多様性国家戦略決定
1997	気候変動防止京都議定書採択	
2000		環境基本計画の改定
2001	京都議定書の正式採択	
2002		新・生物多様性国家戦略決定
2003	カタルヘナ議定書発効	自然再生推進法施行 自然公園法改正(生態系保全の概念追加) 自然再生基本方針閣議決定 カタルヘナ議定書締結

スライド20

生物多様性に関する国内外の動き(3)

	世界	日本
2005		外来生物法施行
2007		戦略的環境アセスメント導入ガイドライン公表 第3次生物多様性国家戦略決定
2008	北海道同僚閣サミット	生物多様性基本法施行
2009		CO2削減25%の削減目標

スライド21

生物多様性の危機に立ち向かう

次なる100年に向けて ~第3次国家戦略より~

3つの目標

- 各地に固有の生態系の保全、生態系ネットワークの形成により、国土の生物多様性を維持・回復すること。とりわけ、種の絶滅のおそれが新たに生じないようにするとともに、現に絶滅の危機に瀕した種の回復を図ること。
- 生物多様性を減少させない方法で、世代を越えて、国土や自然資源の持続可能な利用を行うこと。
- 国際的な視点や国民のライフスタイルの転換を含めて、生物多様性の保全や持続可能な利用を社会経済活動の中に組み込むこと。

スライド22

4つの基本戦略 --- 今なすべきこと

- I 生物多様性を社会に浸透させる**
私たちのいのちと暮らしを支えている生物多様性の保全の重要性が、子供たちの世代も含めて広く一般的な人数となるよう、社会に浸透させていく
- II 地域における人と自然の関係を再構築する**
今後、人口が減少に向かい高齢化が進む中で、人と自然の関係を再構築する
- III 森・里・川・海のつながりを確保する**
それぞれの地域での取組だけでなく、流域全体を視野に入れて、さまざまなスケールで森・里・川・海を連続した空間として保全・再生する
- IV 地球規模の視野を持って行動する**
我が国は、世界の生物多様性に影響を与えている。このことを意識し、地球規模の視野を持って行動する。特に、アジア太平洋地域の生物多様性の保全についてリーダーシップを発揮し、国際的な連携を進めていく

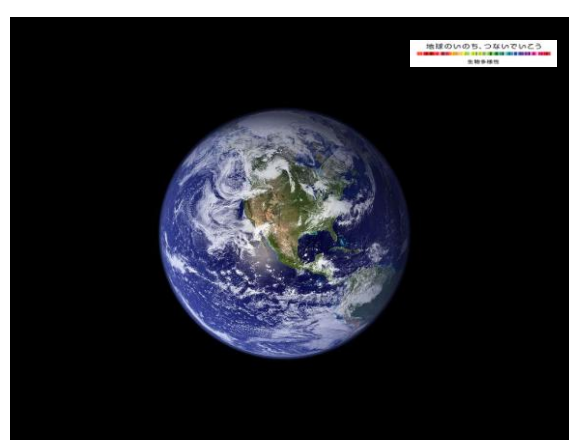
スライド23

力を合わせて 地方や民間の参画

- 地方公共団体の取組
- 企業の取組
- NGOなどの市民団体の取組
- ひとりひとりの取組



スライド24



スライド 1

平成21年度環境カウンセラー研修資料

環境カウンセラー登録制度について

平成21年11月6日
北海道地方環境事務所

スライド 2

1. 環境カウンセラーとは

環境カウンセラーとは、環境保全に関する**専門的知識**や**豊富な経験**を有し、その知見や経験を生かして、市民、NPO、NGO、事業者などに対する助言など（＝環境カウンセリング）を行う能力を有する人材として、**環境カウンセラー登録制度実施規程**に基づき、環境省の行う審査を経て登録された方々です。

登録者数 (平成21年4月現在)	
全国	4,620名
事業者部門	2,554名
市民部門	2,066名
うち両部門	311名
北海道	95名
事業者部門	51名
市民部門	44名
うち両部門	6名

スライド 3

2. カウンセリング活動の流れ

謝金・旅費などについては依頼者と相談して下さい。

スライド 4

3. 環境カウンセラー登録者検索について

操作手順

- ① 環境カウンセラーのページを開きます。
URL
<http://www.env.go.jp/policy/counsel/index.html> へアクセス
- ② 環境カウンセラー登録者検索画面が表示されます。
- ③ 「地域」「専門分野」「カウンセラー氏名」「経歴」「活動実績」「事業者部門 / 市民部門」の項目に条件を入力・選択し、検索します。
- ④ 検索結果が表示されます。
- ⑤ 検索された登録者の氏名をクリックすると、連絡先や経歴等を見ることができます。

スライド 5

4. 環境カウンセラーに期待される役割

環境カウンセリング

・環境保全活動を行おうとする者に対して環境保全及び環境保全活動に関する知識の付与並びに環境保全活動に関する助言又は指導を行うこと
(環境カウンセラー登録制度実施規程第2条)

自発的な環境保全活動

・地域の環境問題の把握・分析や環境保全活動の企画・実践、普及・啓発、あるいは活動団体の立ち上げ・運営、主体間のコーディネートなどのより幅広い役割を自発的・積極的に果たしていくことが期待されている。
(環境カウンセラー登録制度に係る検討会報告「環境カウンセラー制度の推進方策について」より)

スライド 6

5. 登録後の手続きについて

新規登録者向け研修の受講
・3年間の登録期間中に**必ず**受講しなければならない
専門研修の受講(任意)
・新規登録者向け研修を修了した者が対象

スライド 7

6. 登録後にやらなければならないこと

- (1) 最初の更新までに、環境省地方環境事務所が開催する環境カウンセラー研修を受講してください(実施規程第10条4項)。
一度受講した後は、任意で受講してください。
毎年、環境カウンセラー全員に対して研修の案内を送付します。
- (2) 活動実績等報告書を毎年提出してください(実施規程第9条)。
当該年の活動実績を、翌年の1月1日から2月末日までの間に提出してください。
(平成21年度の場合、平成22年1月1日から2月28日の間に提出)
- (3) 登録3年目に更新申請書を提出してください(実施規程第11条)。
登録の有効期間は3年です。登録更新する場合は、(1)、(2)に加え、更新申請書を1月1日から2月末日までの間に提出してください。

スライド 8

7. 活動実績等報告書の提出先

- (1) 提出先
財団法人日本環境協会 環境カウンセラー事務局
 - (2) 報告方法 (郵送または電子メールとなっております)
 - ① 電子メールで counselor-houkoku@japan.email.ne.jp
 - ② 郵送で 〒103-0002
東京都中央区日本橋馬喰町1-4-16
馬喰町第一ビル9階
- ※ ウェブサイトで公開しますので、できるだけ電子メールにて提出してください。様式は以下のアドレスからダウンロードできます。
<http://www.env.go.jp/info/one-stop/03/005.html>

スライド 9

8. カウンセラーの方へのお知らせなど

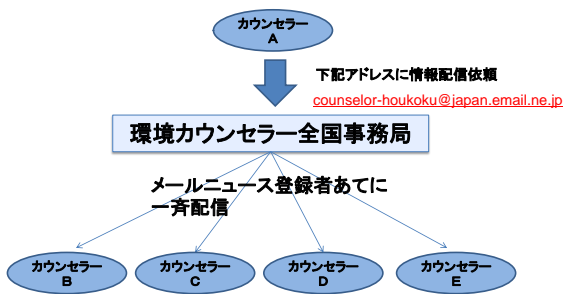


スライド 10



スライド 11

9. 環境カウンセラーメールニュースについて



スライド 12

10. 活動紹介について



スライド13

11. 問い合わせ先

環境省 総合環境政策局 環境教育推進室

TEL:03-5521-8231

Email: counselor@env.go.jp

環境省 北海道地方環境事務所 環境対策課

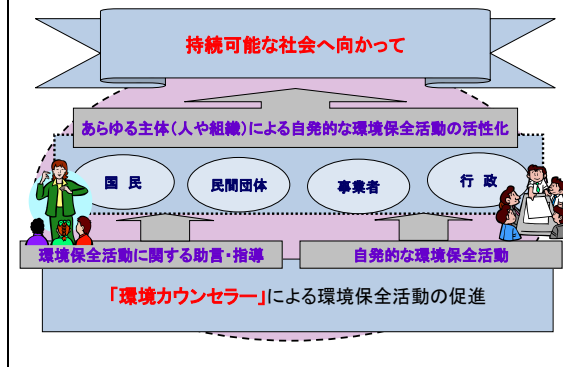
TEL:011-299-1952

Email: REO-HOKKAIDO@env.go.jp

(活動実績等報告書の提出用アドレスとは異なりますので、ご注意ください)

スライド14

12. 制度説明の終わりに



スライド15

環境カウンセラー活用施策



NHK環境教育番組「ど〜する？地球のあした」ウェブサイトにて子どもたちからの質問の回答者として環境カウンセラーを紹介。

資料3

平成 21 年度環境カウンセラー研修（北海道地区）
アンケート

登録部門	部門	登録年度	年度 (登録番号の左4ケタです)
------	----	------	---------------------

次回以降の研修の参考としたいので、以下の項目に御記入下さい。

1. 今回の研修に参加した目的は何ですか。最も当てはまるものを1つだけ選び、○印を付けて下さい。

- イ) 環境カウンセラーとしてのスキルアップのため
- ロ) 環境問題に関する最新情報を入手するため
- ハ) 環境カウンセラー相互の情報交換を行うため
- ニ) 登録更新の要件（研修の修了）を満たすため
- ホ) その他（ ）

2. 環境カウンセラー研修を受講するのは今回で何回目ですか。

（ ）回目

3. 今回の研修プログラムはいかがでしたか。

各項目について、【良かった：○ 普通：△ 良くなかった：×】を御記入下さい。

講演・講義名など	内容について	講師について	時間について	具体的な感想があれば御記入下さい
全体講演 「環境行政の動向について」				
基調講演 「北海道の生物相と生物多 様性」				
講義 「環境カウンセラー登録制 度について」 ※新規登録者のみ回答				

※裏面もございます

講演・講義名など	内容について	講師について	時間について	具体的な感想があればご記入ください
グループディスカッション 「生物多様性について、環境 カウンセラーとしてどう伝 えていくか」 テーマ（ 1 2 3 ） ※数字に○印を付けてくだ さい。		/		

4. 次年度の研修において、講義で希望するテーマや講師、ディスカッションで実施してほしいテーマ等ございましたら、御記入下さい。

5. その他、研修を受講しての感想を御記入下さい。

御協力ありがとうございました。アンケートは、お帰りの際、受付に提出して下さい。

資料 4

受講者アンケート集計結果

開催日時: 11月6日(金)10:00~16:45
 開催場所: 札幌市環境プラザ 環境研修室1・2
 受講者数 27名、アンケート提出者 27名

アンケート提出者の属性

登録部門 市民部門 11名
 事業者部門 15名 市民・事業者両部門 1名

登録年度

H8	3	H9	2	H10	3	H11	1	H12	2	H13	2	H14	2
H15	4	H16		H17	1	H18	3	H19	2	H20	2		

アンケート内容

1. 今回の研修に参加した目的は何ですか。
- イ) 環境カウンセラーとしてのスキルアップのため 13名
 - ロ) 環境問題に関する最新情報を入手するため 10名
 - ハ) 環境カウンセラー相互の情報交換を行うため 2名
 - ニ) 登録更新の要件(研修の修了)を満たすため 2名
 - ホ) その他 0名

2. 環境カウンセラー研修を受講するのはこれで何回目ですか。

1回目	4	2回目	5	3回目	2	4回目	4	5回目	3
6回目	2	7回目	2	10回目	1	未記入	4		

3. 今回の研修プログラムはいかがでしたか。

①全体講演「環境行政の動向について」 環境省北海道地方環境事務所 統括自然保全企画官
 兼 生物多様性企画官 坂本 真一 氏

	内容について	講師について	時間について
良かった	24	24	19
普通	3	2	6
良くなかった			1
未記入		1	1

具体的感想

- ・時間が不足していた。
- ・分かりやすい内容で良かった。
- ・COP10の開催に向け、生物の多様性の問題点が明らかになった。
- ・重点施策の最新情報が分かりやすかった。
- ・とても分かりやすいプレゼンテーションでした。

- ・すごく分かりやすく、素晴らしい講演でした。今までの中でも最高と感動を覚えました。
- ・時間が不足すぎます。(ほか同様の感想1件)
- ・もう少し長く、詳しく。
- ・内容が豊富だったので、もう少し時間があつたら良かった。
- ・分かりやすい内容で、もっと多くの人に環境省の戦略を伝えればよいと思った。
- ・民間参画ガイドラインの話が無かった。企業にどうしてほしいのか環境省の思惑が見えない。

②基調講演「北海道の生物相と生物多様性」 北海道開拓記念館 資料情報課長・

学芸第一課長 堀 繁久 氏

	内容について	講師について	時間について
良かった	27	26	23
普通			3
良くなかった			
未記入		1	1

具体的感想

- ・もう少し時間を長くした方が良いのでは…。
- ・非常に多岐にわたり面白い話でした。
- ・生物多様性への解説がよく理解できた。
- ・非常に面白い話が盛りだくさんであった。
- ・普段聞けない貴重なお話を聞きました。
- ・北海道のことが少しわかりかけました。
- ・めったに聞くことができない昆虫を中心とした講演は素晴らしかったです。感謝します。
- ・長い時間の変化と地域特性の種が極めて重要であることが再認識できました。
- ・生物多様性について、北海道を主体に解説していただき、本当に良かった。
- ・昆虫の話には興味が高かったが、講演を聴いて大変良かった。
- ・生物多様性を地史的、歴史的、現代の3つの視点から日本、北海道に焦点を合わせて講演されたのが良かった。
- ・初めて聞くことばかりで、大変興味深かった。

③講義「環境カウンセラー登録制度について」 北海道地方環境事務所環境対策課

企画係長 今村 和典 氏

	内容について	講師について	時間について
良かった	2	1	3
普通	2	3	1
良くなかった			
未記入			

具体的感想

- ・環境カウンセラーの役割を再考する良い機会になりました。

- ・少し説明が分かりにくい部分があった。

④グループディスカッション「生物多様性について、環境カウンセラーとしてどう伝えていくか」

	内容について	時間について
良かった	19	16
普通	5	6
良くなかった		
未記入	3	5

具体的感想

- ・グループ1 情報・経験・交流ができて良かった。3グループの共有の仕方は再考が必要。
- ・グループ1 生物多様性の視点から、各自の活動を紹介することにより、交流できた。
- ・グループ1 様々な考え方があり、まさに多様性を実感した。
- ・グループ1 取り組むべき項目はいろいろ出てくるのだが、それを価値観の異なる人々にどう広めていくかといったところで暗礁に乗り上げる。他の人に加わってもらうには施策によるインセンティブが必要ではないか。
- ・グループ2 もっと時間をかけて、環境カウンセラーとしての活動に結び付けると良いの shouldn't でしょうね。
- ・グループ3 皆さんまとめ方を理解されていたので、発言も多く、スムーズに進行した。書記と説明者はくじ引きで行ったので、時間がかからなかった。
- ・グループ3 内容が有意義であった。
- ・グループ3 幅広い年齢層の方々のお考えを伺えて、参考になりました。ただ、発表時間の15分は長いのでは？1グループの人数を少なくして、グループを増やした方が良いと思います。
- ・グループ3 伝え方についての検討・話し合いが必要では？
- ・グループ3 啓発への具体的方法を検討する時間が不足していた。
- ・不明 生物多様性について多面的な意見が出され、とても良いディスカッションができたと思います。多種多様で良かったです。

4. 次年度の研修において、講義で希望するテーマや講師、ディスカッションで実施してほしいテーマ等

- ・「生物多様性」・・・環境保全の本質、全体像をきちんと押さえ、日常の活動に生かせる内容を希望。
- ・生物多様性の保全の法的取組について。
- ・相互の交流を図る機会をつくってほしい。
- ・二酸化炭素25%削減の具体的取組。
- ・地球温暖化防止。
- ・二酸化炭素の排出削減、省エネルギー、公共事業の見直しと環境保全。
- ・講義として、ピアンカさんのドイツと日本の違いや、日本の良さ悪さを聴いてみたい。また、長谷川さんの講義も聴いてみたい。
- ・生物多様性、地球温暖化対策等一般論ではなく、「北海道ならではの」という視点での取組紹介や議論があっ

た方が良いと思う。カウンセリングテクニックについての講義もあった方が良いのでは？

- ・「持続性と活力あるNGO活動」などの事例をテーマにしていただきたい。
- ・地球温暖化と北海道の今後・・・経済的側面、役割について。
- ・「環境教育について」・・・小・中学校で環境教育を実践されている方に具体例や御苦労されている点などをお聞きしたい。

5. その他、研修を受講しての感想

- ・生物多様性について、もう一つ別のテーマで開催してほしい。
- ・大切な時間を皆さんと共有できました。
- ・講演・グループ討論ともに充実していた。参加者が積極的に討論に参加していた。
- ・生物多様性について、あらためて考えさせられた。グループディスカッションで9人の仲間と交流し、様々な活動をしている方々の実践を伺うことができ、参考になった。
- ・他のカウンセラーの頑張り方が参考になった。
- ・大変有効な研修であった。
- ・生物多様性は目新しい内容であったが、一番身近で研究している方が講師であったのと、身近な生物の説明をしながら解説されたので、よく理解できた。とても良い人選であったと思う。
- ・生物多様性企画官の説明も分かりやすかったし、今後の方向も理解できた。
- ・グループディスカッションは時間にもゆとりがあり、慣れもあつてか積極的な発言もあり、良かった。
- ・御苦労様でした。
- ・今年の研修は講師も素晴らしく百点満点です。
- ・他の環境カウンセラーの方々と初めてお会いしましたが、年齢層が高いという印象を受けました。もう少し若手の間でも環境カウンセラーが広がってほしいと思います(現役世代の方は忙しくて研修に参加しづらいだけかもしれませんが・・・)。

平成 21 年度北海道地方環境事務所請負業務

平成 21 年度環境カウンセラー研修企画検討等業務実績報告書

2009 年 12 月

特定非営利活動法人 北海道環境カウンセラー協会

〒063-0801 札幌市西区二十四軒一条 5 丁目 1-2-705 環境経営オフィス気付

TEL 011-633-3306 FAX 011-633-3306

URL : <http://www.heca.name/>

リサイクル適性の表示 : 紙へリサイクル化

本冊子は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係る判断の基準に従い、印刷用の紙へのリサイクルに適した材料[Aランク]のみを用いて作製しています。